

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
早送りの録画のやうな年の暮	雨あがる玉砂利の音伊勢参	妻送り里を偲ぶか寒昂	初雀日輪浴びて枝に満つ	福笑ひすればピカソのころかな	初東風や気象を癒す美空かな	醪（もろみ）の息そっとうかがふ寒の蔵	寒風や七十五畳の日章旗	すれ違ふ漁夫に仄かな焚火の香	リモートで挨拶交はすお正月	追分の今泣き処冬の宿	日脚伸び己が影追う足軽し	初春や雲一つ無き父の寺	元朝の威風橙餅に載る	お地蔵の赤きマスクや実南天	エアコンの繭玉飾り風にゆれ	研ぎ癖のつきし砥石や寒の入	巡り逢う地球と独楽と地球独楽	風花や過去のページは火にくべる	冬至風帽子飛ばして吹き止まず

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	◆水明インターネット句会◆ 令和四年一月
ゴミ漁り寛ぐ街の寒鴉	永遠に花鳥風詠懐手	しくじりで初笑いとする猿まわし	花柄のお守り四つ初太鼓	途絶へたる父手作りの柳箸	左義長の炎におどろく森の精	賽銭箱かすめる風や去年今年	空白のページに栞初茜	そそぐ愛つぎたす夢の屠蘇の杯	冬眠の準備か妻はよく食べる	友の本から半券はらり冬うらら	焚火の香篝目著るき朝の庭	二合半 <small>(こなから)</small> 酒の程よく廻り初稽古	更の簿に出入り始まる四日かな	出囃子にしはぶきひとつ八五郎	荘厳な松の立ち生け年新た	風さけて些か甘き黄水仙	「たにがわ」の抜くるトンネル冴ゆる空	口上に笑ひ零るる猿廻し	捨てられし子なれどわれに粉雪の降る	

